

学校経営のポイント

人を諭し感動させる工夫と教養

若井 彌一

養老孟司氏の『バカの壁』(新潮新書)がちょっとしたヒット作品になっているようである。本の帯には『話せばわかる』なんて大うそ」と強調見出しが書いてある。

この人の本を読んだ人々が本の内容に納得し、感動したかどうかを調査したわけではないが、とにかく売れていることは確かである。

多くの人に読まれている『バカの壁』

この本の推薦文を書こうという意図ではないけれども、『バカの壁』という少々興味をひくタイトル本の内容は? と思って目次を見ると、第1章・「バカの壁」とは何か、第2章・脳の中の係数、第3章・「個性を伸ばせ」という欺瞞、第4章・万物流転、情報不変、第5章・無意識・身体・共同体、第6章・バカの脳、第7章・教育の怪しさ、第8章・一元論を超えて、という構成となっている。

解剖学という、著者の専門を生かした昨今の社会批評を含んだ教養論が展開されており、一食分の代金を節約して読んでみる価値は十分にあると思われる。

壁という文字を用いたタイトルで思い出される本に、石川達三の『人間の壁』がある。タイトルが重要であるのは、昔も今も変わらないが、タイトルだけではロングセラーにはならない。『人間の壁』は、超ロングセラーの教育問題書の一冊である。

『バカの壁』というタイトル本を引き合いに出したのは、バカという言葉(表現)は、使い方によっては差別発言として糾弾の対象にもなるという一面をもっているからである。

残念なことだが、教員の暴言や差別発言が、最近のマスコミ報道でおもしろおかしく取り上げられている。

粗野な暴言では教育効果はあがらない

その一つは、「バカ」「死ぬ!」などの発言を小学生に繰り返した男性教員の授業が問題となり、その教員の授業に監視役(というより指導・助言役)の教員をつけないければならない事態となったという例である。

もう一つは、親族に外国籍を有する人がいる小学生に、男性教員が「おまえの血は穢れている」などの明らかな差別発言や体罰を繰り返し、結局、停職に追い込まれたという例である。

この二つの例とも、教員側はもっともらしい弁明をしているが、共通しているのは、仮りに教育的意図があったとしても、これらの教員による言動によっては、児童は納得もしていないし、感動もしていないという事実である。

それだけでなく、人事上の措置を講ぜざるを得ない結果を招いており、二人の教員の言動は、教職という職全体の信用を著しく傷つけている。

もっとも、教員だけでなく、裁判官も暴走族少年に対する少年審判において、「君たちは産業廃棄物以下」などと諭そうとしたとして、親族側が反発の意見を表明していることが取り沙汰されている。諭しのつもりが問題発言、あるいは不適切発言として反対に話題にされるという皮肉な結果を招いているのである。

児童・生徒に対してだけでなく、人(他人)を諭し、感動させるには、相当の工夫と背景または支えとなる教養が必要である。各学級でどのような努力をしたらよいか、ぜひ教職員研修の話題として取りあげてみていただきたい。

(わかい・やいち=上越教育大学教授)

<http://www.kyouiku-kaihatu.co.jp> にも掲載

●新刊案内●

読本シリーズ最新刊・10月20日出版・好評発売中!

教育開発研究所刊

教職研修総合特集 No.159 【編集】高階玲治/A5判220頁・定価2310円

『2学期制の学校経営《導入と展開》』

研修誌・図書の小社への直接注文は、無料FAX 0120-462-488をご利用ください(24時間受付・即日発送)